

## 巻頭言「生きることの質(QOL)は客観的に測れるものなのだろうか？」

吉村 功 (東京理科大学)

Biometrics は, biology に関することを量で把握し, 理解しようとする方法論である, と私は考えています。しかしその方法論を適用しようとして迷うことが, ときにあります。これについてごく個人的な経験を語ってみます。

ちょっとしたきっかけで, タバコの臨床試験に関わることになりました。10 人余の委員会ですが, タバコを吸ったことがないのは私だけです。ほとんどの人がヘビースモーカー, あるいは過去にそうだった人です。どの方も, タバコが病気のリスクを大きくすることをよく知っていますし, 依存性があることも知っています。そこで私は問うわけです。「何でタバコを吸うのですか」「ニコチンガムやニコチンパッチではダメですか」「煙のでないタバコはどうですか」「タール分を皆無に近くしたタバコはいけませんか」「タバコの効用は何ですか」いろいろと答えをいただきます。要は, 「麻薬のような破滅性のない向精神薬」ということのようにです。たとえば言えば寿命を縮めるという副作用のある抗うつ剤, でしょうか。

私も鬱の気分になることがよくあります。そんなときでも私はタバコに手を出しません。暗い穴蔵のような喫茶店でうずくまっているか, 人気のあまりない飲み屋のカウンターで酒をたしなむか, 自宅の部屋で哀愁のある音楽を聞きながら小説を読むか, といった対処をします。これに対してタバコのみは, 重症になる前に軽く鬱気分を払拭するすばらしい向精神薬を持っているようです。タバコによる QOL はいったい何だろう, 測れるものなのだろうか, と答えが出せないうえです。

話を変えます。高齢男性が出くわす病的障碍の一つは, 前立腺肥大による頻尿・排尿障害です。現代医学は, これに対して薬物治療や外科手術を用意しています。これらの治療には, かなり大きな頻度で尿漏れ, 勃起不全(ED), 射精障碍という副作用が生じます。頻尿や排尿障害はたいへん不愉快な自覚症状で QOL を非常に悪くします。しかしでは, 治療をしたらどうかというと, 尿漏れや ED という問題が生じます。前者については, 手術経験が数百例というある泌尿器科医が面白い研究報告を出しています。『ほとんどの患者は 60 歳を超える人で, 「ED の確率がかなり高いと思って下さい」というと, 「この歳ですから, 気にしません」と答えて, 同意書にサインするのです。ところが, 実際に外科手術を行った後, たまたまうまくいって勃起が維持できたりすると, 「先生, 大丈夫でした」とものすごくうれしそうにするんです。建て前と本音は違うので, 本音は覚悟を語っているだけだと, つくづく思いました』というわけです。

このような場合, 頻尿などによる QOL の低下と, ED や尿漏れによる QOL の低下をアンケートで聞くと, 個々の患者にとっては(歴史の一回性という問題があって), 未経験の事柄に対して観念的な回答を出します。このような回答を信用して, 差し引き計算などをして QOL 値の集団としての平均を取ったりすると, 偏った計量化になりそうです。

今のところ, この種の個人内のプラスマイナスについては, 正確なデータを示し, 意味を説明して, 後は本人の選択にゆだねるという実例を多く積み重ね, その全体像から然るべき biometrics のストラテジーを作り上げることくらいしかないのではないかと, 考えているところですが, 皆さんの考えはいかがでしょうか。

## 会長からのお知らせ

会長 丹後俊郎

最近決まった学術会議会員の顔ぶれを拝見すると, 「情報学から 13 名の会員が選出されたにもかかわらず, 統計科学からは誰も選出されなかった」という統計科学の危機的な状況があらわになっています。この背景には, なんとんでも科研費の統計科学分野への応募が少ないことが大きく響いているように思われます。このまま推移すると, 細目からも消えてしまう可能性もあり, これは, 社会的にはまだまだ統計科学が認知されていないことを端的に示している証拠(エビデンス)といわざるを得ません。これでは, 最近, 折角伸びてきた統計科学の芽を自ら摘み取るようなもので, またまた情報科学に吸収され, 衰退の一途を辿る可能性も否定できません。このようなことのないようにするには, 統計関連学会が一致団結して統計科学の存在価値を高めていくしか方法がないように思います。

現在, 応用統計学会, 日本計算機統計学会, 日本計量生物学会, 日本行動計量学会, 日本統計学会, 日本分類学会の 6 学会が参加している統計関連学会連合 JFSSA (Japanese Federation of Statistical Science Association) の理事会では, 各種共同事業を推進するための協議を行っています。連合大会は, 統計科学の有用性を社会にアピールできる絶好の場ともいえます。日本計量生物学会では, 年次大会を連合大会として共同開催してきました。統計科学の上述のような危機的状況から脱出するには, 連合大会の規模を大きくして, その参加者数の多さで社会的影響力を強めるとともに, 各学会がそれぞれの分野の(独自性を主張するのではなく)特色を生かし, かつ, 社会の今日的課題に取り組んだ質の高い研究で統計科学の社会的重要性・有用性を世にアピールしていく努力が必要不可欠な要素となっています。

その意味でも, 本年 7 月に行った 2007 年統計関連学会連合大会参加に関するアンケート調査結果で, 回答率は 26% と残念ながら低調でしたが, 連合大会参加への反対は 14% と極めて少なく, 今後の連合大会へ参加するという会員の皆様の意向が確認されました。そこで, 学会員の皆様には年次大会である連合大会で, これまで以上に problem-oriented な研究発表をお願いしたいと考えています。また, 来年の 2006 年連合大会では生物統計学(Biostatistics)の社会的重要性・有用性を積極的に世にアピールするための企画セッションの一つとして「仮タイトル: 生物統計学の社会的貢献」のようなセッションを企画できないか, 検討中です。統計科学の社会的認知に向けて会員諸氏のアイデア, ご意見を, ぜひ, 学会 (biometrics@sinfonica.or.jp)へお寄せください。

## 2006年度日本計量生物学会シンポジウムのプログラムについてお知らせ

企画(シンポジウム)担当理事  
大橋靖雄, 松浦正明, 森川敏彦

前回の対面理事会(9.12;広島プリンス H)にて企画理事より, 原案を提出し, その案に沿って企画理事で案を煮詰めることが了承された. その後の大橋・松浦・森川による協議, 並びに丹後会長の提案等を踏まえて以下の企画で臨むこととした. なお開催日は 2006 年5月 25 日(木), 26 日(金)で, 開催場所は国立保健医療科学院講堂の予定である.

### シンポジウムテーマ: 複雑な観察データの解析

複雑なデータの解析に関する最近の理論展開と応用を踏まえ, また疫学やバイオインフォマティクス・環境等への応用を意識して, シンポジウムテーマを「複雑な観察データの解析」としました. 今後シンポジウムとしての性格をより明確に発揮できる催しにしたいと考えておりますので, 会員の皆様にはこれまで以上にシンポジウムテーマに沿った演題の積極的な発表をお願いする予定です. よろしくご協力をお願い致します.

### 特別セッション

テーマ: 「空間疫学の新展開 - New Development of Spatial Epidemiology」

オーガナイザ: 丹後俊郎 (国立保健医療科学院)

1. 大瀧 慈, 佐藤健一, 川崎 裕美(広島大学), 柳原宏和(筑波大学), 山口直人(東京女子医大), 加茂憲一(札幌医大), 吉見逸郎(国立がんセンター), 金子聡(長崎大), 祖父江友孝(国立がんセンター)  
Empirical bayes method for estimating spatial-time distribution of cancer mortality using nonparametric smoothing
2. 中谷友樹(立命館大学), Fotheringham AS, Charlton M (National Center for Geocomputation, Ireland), Brunson C (University of Leicester, UK)  
Geographically weighted Poisson regression for disease associative mapping
3. 高橋邦彦, 横山徹爾, 丹後俊郎(国立保健医療科学院), Martin Kulldorff (Harvard Medical School, USA)  
Scan statistics for detecting spatial and space-time disease clusters
4. 片岡裕介(東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻), 浅見泰司(東京大学空間情報科学研究センター)  
空間分布の少数の母点によるカーネル密度近似法とその応用  
(上記は現時点での案です. 変更の可能性あります.)

### チュートリアル

テーマ: 「Rによる生物統計解析」

演者: 中澤港氏 (群馬大学)他

概論と疫学・バイオインフォマティクス等, 特定の分野における各論に分けて解説して頂く予定です.

## 日本計量生物学会特別講演会のお知らせ

庶務(国内)担当理事 山岡和枝

日本計量生物学会特別講演会「バイオテロリズムの兆候監視のための統計的方法 - バイオテロリズムの兆候をいかに発見するか -」(Statistical Methods for Syndromic Surveillance - Early Warnings of Bioterrorism -)を下記の要領で開催します. WEBでの案内も合わせてご覧下さい.

<http://www.niph.go.jp/soshiki/gijutsu/sympo05/keiryokulldorff2.pdf>

本講演では, Syndromic Surveillance に計量生物学的モデルの開発という視点から取り組んで来られた, 米国ハーバード大学医学部救急予防の Kulldorff 助教授を講師に迎え, 米国での新しい研究について紹介して頂き討議を行います. 会員の皆様のご参加をお待ちしております.

日 時: 11月24日(木)午後2時30分~4時30分  
場 所: 統計数理研究所講堂  
司 会: 丹後俊郎  
主 催: 日本計量生物学会  
後 援: 統計数理研究所  
参加費: 無料

### 講演者・話題

1. Kulldorff, M (米ハーバード大学助教授) バイオテロリズムの兆候監視のための統計的方法
2. 丹後俊郎(国立保健医療科学院) 疾病集積性検出の統計的方法: Spatial Scan Statistic を中心として

## 日本学術会議の報告

第19期日本学術会議第4部会員 柳川 堯

私も第19期学術会議会員は9月末日で辞任し, 10月1日から新しい体制の日本学術会議が発足した. 新しい日本学術会議の会員は, 30名の委員からなる選考委員会によって選出された. 第2回目以降は学術会議会員の推薦によって選出される (cooptation) ことになっている. 新学術会議会員の名簿は学術会議の次のホームページに与えられている.

<http://www.scj.go.jp/ja/info/member/index.html>

残念なことに統計科学関係の新会員の名は見られない. 従来第3部に設置されていた経済統計研究連絡委員会関連の新会員もゼロのようである. 日本学術会議発足以来こんなことは初めてである. ショックである. 第19期統計学研究連絡委員会は, このような事態が生じないように危機感を持ち最大の尽力を行った積りであるが, このような結果となり統計関連学会の研究者諸氏に力不足をお詫びするとともに恥じ入るところ多大である. 統計関連学会から次期会員が必ず選出されるように, 連合の力をより一層強く結集させて諸活動に高い成果を挙げていただくよう切にお願いしたい.

統計学連絡委員会は, 以下のような引継ぎ事項を「遺言」として残すこととした. 新しい学術会議の体制では, 統計学研究連絡委員会は消滅するが連携会員は必ず統計科学分野から選出され, 統計学研究連絡委員会が行ってきた活動を継続・発展する力になっていただけるものと確信するからである. ところで, 私どもの「遺言」は2通ある. 他の1通は対外報告「知識創造社会に向けた統計教育の推

進について」である。これは、平成10年度の学習指導要領で義務教育レベルで統計関連の単元が大幅削減されたことに対して、時代の方向性に合わないことを指摘した上で「問題解決能力・問題探求能力の育成を目指したデータ処理と確率」教育を義務教育の中で重視し、世界をリード出来る人材養成に比重を高めることが重要であるという観点から提言を行ったものである。報告書全文は以下のHPから入手できるので、ぜひ読んでいただきたい。

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-19-t1031-10.pdf>

本対外報告書は、官房長はじめ文部科学省の関係者および中央教育委員会の会長・副会長に送付した。なお、本報告書は、日本統計学会統計教育分科会が主体となって作成し関係官庁関係者に提出した要望書をバックアップすることを目的としている。渡辺美智子さんがそのリエイゾンとして果たした役割は大きい。感謝したい。また、学術会議報告は私見を交えた拙いものにすぎなかったが、多くの読者から暖かいご支援と助言をいただいた。深く感謝いたします。

### 統計学研究連絡委員会 引き継ぎ事項

統計学研究連絡委員会委員長 柳川 堯

統計学研究連絡委員会は、主に次のような活動を行ってきた。

1. 勧告
  - 統計学の大学院研究教育体制の改善について(勧告)(昭和58年11月)
2. 対外報告
  - 統計学研究教育体制の整備のための具体的方策について(平成2年12月)
  - 知識創造社会に向けた統計教育の推進について(平成17年7月)
3. 公開講演会・シンポジウム
  - シンポジウム「大学教育における統計学」(平成5年11月4日)
  - 公開講演会「地球環境の統計」(平成6年4月20日)
  - 公開講演会「統計の教育体制—その国際的展望—」(平成8年1月26日)
  - シンポジウム「21世紀に向けての統計科学の課題と方向—新しいパラダイムの構築」(平成11年7月31日)
  - シンポジウム「事例中心に見る統計科学の統計科学の現代的価値」(平成16年9月3日)
  - シンポジウム「統計科学の統計科学の現代的価値」(平成17年9月13日)

新しい体制の下で10月1日より発足する日本学術会議では、連絡委員会が解消され課題別委員会と分野別委員会の設立が予定されている。わが国における統計科学の研究教育が日本学術会議の新体制の下で円滑に振興・発展することを願い統計学研究連絡委員会は、以下の二点を引き継ぎ事項として書き残すこととした。

1. 日本学術会議ホームページに掲載されている、日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会による「日本学術会議の新しい体制の在り方～新体制の円滑な発足のための提案～」の項目 IV-6 設置すべき分野別委員会(案)において、統計学は「数学分野別委員会」に入っている。統計学は、人文科学、社会科学、自然科学のあらゆる分野における数量的理解の基盤として、人文科

学、理工学、生命科学のいずれとも密接に関連した複合分野の学問である。数学に密接に関連した数理統計学だけが統計学ではない。このような統計学を「数学」という分野に限定することは、統計学の健全な発展を阻害する可能性がある。私たちは懸念する。そこで、1. 複合分野を正當に評価した分野別委員会の設置の実現、2. 現提案について根本的な変更が難しい場合は、少なくとも「数学」分野別委員会の名を「数理科学」分野別委員会に変更していただきたいこと。

2. また、International Statistical Institute 等、統計科学に関連する国際学会の国内対応組織の構築を統計学研究連絡委員会で進めてきたが、まだ実現化されていない。この実現化をはかること。

注意) 上記「新体制の円滑な発足のための提案」は下記の日本学術会議のホームページに記載されています。

<http://www.scj.go.jp/ja/scj/kondan/giji10.html>

### 計量生物セミナーのご報告とお知らせ

企画(セミナー)担当理事 上坂浩之、森川敏彦

#### 1. 報告

2005年9月21日(水)13:30～22日(木)15:00の2日間、富士ゼロックス総合教育研究所スペースアルファ神戸において、久しぶりに計量生物セミナーを開催しました。今回のテーマは、「臨床評価における統計学上の論点」でしたが、会員を中心として86名もの参加があり、活発な議論が展開されました。一人一室も好評でした。

プログラムの詳細はニュースレター第88号をご参照頂きたいのですが、今回のセミナーは、ICH E9 統計ガイドラインに記載されているものの、実際の適用に論議があり、より具体的で突っ込んだ議論が必要と思われる重要な4トピック(①共変量調整、②欠側値の扱い、③多重性、④非劣性)について、EUの新薬審査部門であるCPMP(現CHMP)のPoints to Consider(PtC)をたたき台として検討しようということ企画したものです。

セミナーの方法としては、各トピックについてまず話題提供者からPtCの内容紹介と議論の材料提供を行ってもらい、同じトピックに対し企業、及び規制当局または大学・研究機関のそれぞれから議論してもらった上でフロアと一緒に議論しようという意欲的な企画でしたが、成功裏に終了し企画担当として喜んでおります。特に検証とはなにかというより根本的な問題を改めて考えさせる機会となったことはよかったです。

しかし今回はかなり欲張って多くのトピックを扱った結果、1トピック当りの時間が足りなくなりました。例えば話題1. 共変量調整に関して大きな論議を呼んでいる動的割付けの問題や、話題4. 非劣性の検証に関して実際的に悩ましいΔの選択問題など、重要な問題を十分議論することができなかったことが残念に感じられます。この経験は今後のセミナーの企画に反映させたいと考えています。

最後に開発途上国支援義捐金に関しましては、多くの方(驚くべきことにセミナーに参加された殆どの方)から募金を行って頂きました。皆様の善意に心から感謝申し上げます。本件に関してはセミナー閉会の挨拶で丹後会長から

も感謝の意が述べられました。一同の気持ちが一体になったようで、よかったです。

### セミナーピックアップ及び演者

以下の方々には大変忙しい中演者としてセミナーを支えていただきました。ここに記して感謝致します。またセミナーで討論頂いた諸氏にも感謝致します。

- 話題1: Points to consider on adjustment for baseline covariates  
話題提供者: 萩野 篤司 氏(持田製薬株)  
討論者: 清見 文明 氏(ノボルディスク株)  
服部 聡 氏(久留米大学)
- 話題2: Points to Consider on Missing data  
話題提供者: 渡辺 秀章 氏(塩野義製薬株)  
討論者: 松井 研一 氏(シミック株)  
松井 茂之 氏(京都大学)
- 話題3: Points to Consider on Multiplicity Issues in Clinical Trials  
話題提供者: 藤越 慎治 氏(日本イーライリリー株)  
討論者: 渡邊 裕之 氏(萬有製薬株)  
柴田 大朗 氏(国立がんセンター)
- 話題4: Points to Consider on Switching between Superiority and Non-inferiority & Guideline on Choice of Delta  
話題提供者: 西山 智 氏(武田薬品工業株)  
討論者: 小山 暢之 氏(三共株)  
丹後 俊郎 氏(保健医療科学院)
- 総括意見: 森 和彦 氏(医薬品医療機器総合機構)

### 2. お知らせ

1) 本セミナーにつきましては、「計量生物学」特集号としてセミナー記録を掲載する予定です。意欲的な特集号にする積りで成蹊大学岩崎学氏と京都大学松井茂之氏に特別編集委員として加わって貰いました。来春を目処に進めています。各話題提供者・討論者各位にはセミナーでの討論の内容を踏まえた論文としての原稿作成をお願いしております。期限は11月末日となっておりますので宜しくお願い致します。またこれらの方々の議論に対して、質問や意見を出して頂くようにセミナー参加者各位をお願いしています。これは10月一杯ですのでこちらも宜しくお願い致します。提出されました意見に対しては特集号誌上で各話題提供者・討論者に rejoinder として回答していただく予定です。

2) 来年も引き続き臨床を対象としたセミナー開催を考慮しており、意欲的なテーマを取り上げる予定です。会員の皆様からご意見・ご希望があれば検討したいと思いますので、できれば年内にセミナー企画担当まで、ご連絡下さい。

上坂: uesaka\_hiroyuki@lilly.com

森川: morikawa\_t@med.kurume-u.ac.jp

### 2005年度日本計量生物学会理事会 議事録 庶務(国内)担当理事 山岡和枝

日時: 2005年9月12日(月)19:00~20:30

会場: 広島プリンスホテル会議室

出席者: 浜田, 松浦, 森川, 佐藤(健), 大瀧, 岩崎, 岸野, 酒井, 松山, 上坂, 丹後, 山岡, 吉村・柳川(監事)

欠席者: 椿, 佐藤(俊), 大橋, 三中

議事:

1. 第3回 e-mail 理事会議事録  
第3回 e-mail 理事会議事録を承認した。

### 2. 2005年度計量生物セミナー

9月21-22日神戸スペースアルファで開催予定の「臨床評価における統計学上の論点」セミナーの会計方針について、参加費は会員18000円(実費)、非会員25000円、正講師からは参加費を徴収しない、セミナー記録を計量生物学の特集号として残すことにし、査読を含む特別編集委員4名(上坂・森川・岩崎・松井)で査読を行い、来年度に発刊する予定であることが報告された。

### 3. 編集委員会

第26巻2号を、年内を目処に発行予定であること、「計量生物学」投稿論文の編集状況について報告された。

### 4. 会報

会報の発行状況について報告され、現在、11月号の準備に取りかかっており、10月から原稿を収集予定であることが報告された。

### 5. 学会メーリングリスト(JBS)

現在のメーリングリスト(JBS)の運用状況について報告され、今後さらに登録会員数を増やし活性化するべく努力をしていくことが確認された。

### 6. 日本計量生物学会特別講演会

日本計量生物学会特別講演会「バイオテロリズムの兆候監視のための統計的方法—バイオテロリズムの兆候をいかに発見するか—」を、統計数理研究所後援として、11月24日に同所で開催する予定であることが報告された。

### 7. 2007年度統計関連学会連合への参加に関するアンケート調査結果

統計関連学会連合への参加に関するアンケート調査について、ワーキンググループでの検討結果が報告された。

### 8. 会員名簿

会員名簿の記載内容および10月には作成を開始することが承認された。

### 9. 2006年計量生物シンポジウム

2006年度シンポジウムを5月25日-27日に国立保健医療科学院講堂(後半は応用統計学会シンポジウム)で実施する予定であること、およびそのテーマ案やチュートリアルテーマ案などが討議され、企画担当理事がさらに検討をしていくことになった。

### 10. 2007年度統計関連学会連合への参加

2007年度統計関連学会連合への参加について審議され、今後、同じような形態で統計関連学会連合が行うことになった場合には参加するという方向で検討していくことが承認された。

### 2005年度第4回 e-mail 理事会 議事録

標記 e-mail 理事会が2005年9月27日~10月3日にかけて行われ、下記の議事について審議した。

1. 第3回対面理事会議事録の確認  
第3回対面理事会議事録が確認された。
2. 会員名簿案  
会員名簿案が確認された。

3. リスク研究ネットワークへの参加  
統計数理研究所リスク解析戦略研究センター長より依頼のあった、リスク研究ネットワークの発起組織としての参画に関して、計量生物学会として、リスクネットワークへ参加することが承認された。
4. 横幹連合への参加  
横幹連合への参加に関しては、参加するのに賛成が多かったが、保留の意見として具体的にどのようなことをするのか、メリット・デメリットがわからないという意見も考慮し、当面参加ということで参加することとした。

## 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い 編集担当理事 松山 裕

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の5種類の投稿原稿が設けてあります。

1. 原著 (Original Article)  
計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。
2. 総説 (Review)  
あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。
3. 研究速報 (Preliminary Report)  
原著ほどまとまっていなくてもノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。
4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)  
会員が現実に直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者(著者)名は掲載時には匿名も可とする。
5. 読者の声 (Letter to the Editor)  
雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。また、2004年度から学会に3つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌, Biometrics, JABES に掲載された論文の著者(単著でなくても第1著者かそれに準ずる者)で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年1名以上に与えられる賞」です。最近では、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くとき公募の際に引け目を感じるくらいです。会員諸氏の意欲的な論文投稿をお待ちしております。なお、投稿に際しては、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程を参照してください。

## 統計関連学会連合大会参加に関するアンケート調査のまとめ

日本計量生物学会ワーキンググループ

2005年7月に行った標記アンケート調査は、個人会員

416名(海外2名除く)のうち、108名の会員から回答が得られた(回収率26%)。日本計量生物学会会員の所属学会は、統計関連6学会のなかでは、本会員に加え、応用統計学会(46%)、日本統計学会(40%)が多かった。そこで主な回答結果を、全体のほか所属学会のタイプとして、単独(日本計量生物学会のみ)、2学会所属(日本計量生物学会、応用統計学会または日本統計学会)、3学会所属(日本計量生物学会、応用統計学会、日本統計学会)について集計し回答傾向をみた(表1)。

### 1. 統計関連学会連合大会への参加

これまでの統計関連学会連合大会(Q1)には、75%の会員が参加したことがあると回答し、日本計量生物学会単独の所属に比べて、2学会以上所属する会員でその割合が多かった。以前の合同年次大会への参加(Q2)や今年度の統計関連学会連合大会予定(Q3)でも同様な傾向が見られた。

2007年度の統計関連学会連合大会への参加(Q4)に関しては、全体では64%が参加する方がよいと回答し、所属学会のタイプによる相違はほとんどなかった。また、今後の統計関連学会連合大会への参加頻度(Q6)に関しては、毎年参加が過半数を占めており、2学会所属、3学会所属となるにつれ、その割合が高くなっていった。一方で、今後の日本計量生物学会の年次開催(Q7)に関しては、日本計量生物学会のみの所属会員の53%が単独で行うことを希望していた。

2. 統計関連学会連合大会への参加のメリット・デメリット  
統計関連学会連合大会への参加のメリット・デメリットに関する自由回答として、主として以下の意見が挙げられた。

#### メリット

- 一度に色々な話が聞ける
- 他の学会員に学会の存在(意義)をアピールできる
- 他学会の会員と交流ができる
- 参加者の旅費やスケジュール調整

#### デメリット

- 期間が長くなる、計量生物関係のセッションが散らばってしまう
- 参加へのチャンスが減る、平行セッションが多くなる
- 学会の設立主旨が生きない、独自性がなくなる、日本統計学会の印象が強い
- 参加費が高い
- 的を射ない質問が多くなる
- 平行セッションが多くなる

### 3. シンポジウムの位置づけ

シンポジウムの位置づけ(Q8)に関しては、年次大会とシンポジウムの差が分からないという意見も多かったが、年次大会は研究発表の場、シンポジウムは実際問題の討論の場として考える意見も多く、シンポジウムの開催方針(存在意義)を明確にすることで、連合大会の参加意義もより明確になると思われた。

### 4. まとめ

連合大会としての参加は過半数の会員が肯定的意見を持ち、そのメリットとして連合大会は一度に色々な話が聞ける機会であり、それは、他の学会員が計量生物の話題に触れる機会とも言え学会の存在(意義)を十分アピールし得る、などがある。ただし、日程の組み方やセッションの

まとめ方に関しては、今後、とりまとめて行うなどの形態も含め、検討していく必要がある。同時に、シンポジウムにおいて学会独自のテーマを取り上げ、学会の特色や方向性をより明確に打ち出すようにすることが望ましいと考えられた。

計量生物学会ニュースレター89号  
2005年11月1日発行  
発行者 日本計量生物学会  
発行責任者 丹後 俊郎  
編集者 佐藤健一, 酒井弘憲

表1. 統計関連学会連合大会参加に関するアンケート集計結果

項目	カテゴリー	全体	計量生物の み	計量生物+ 応用または 統計	計量生物+ 応用+統計
		n=108	n=32	n=42	n=29
Q1. これまでの統計関連学会連合大会への参加	ある	75%	59%	90%	93%
Q2. 以前の合同年次大会への参加	ほぼ毎回	35%	31%	45%	58%
	ときどき	35%	16%	35%	20%
	したことがある	12%	19%	11%	10%
	なし	18%	34%	7%	10%
Q3. 今年度の統計関連学会連合大会への参加	参加予定	60%	44%	83%	89%
Q4. 2007年度統計関連学会連合大会への参加	参加するほうがよい	64%	66%	69%	72%
	参加しないほうがよい	14%	13%	11%	13%
	どちらでもよい	21%	22%	19%	13%
Q5. 統計関連学会連合大会への参加のメリット 1. 重要性・必要性などを社会にアピール 2. 類似の方法論、トピックスなどの講演が聴ける 3. その他		34%	39%	56%	76%
		60%	75%	67%	60%
	(別紙)				
Q5. 統計関連学会連合大会への参加のデメリット 1. 大会期間が長くなる。 2. 他の学会の発表には興味がない 3. 独自性がなくなる 4. その他		31%	54%	39%	46%
		10%	27%	8%	7%
		33%	35%	65%	76%
	(別紙)				
Q6. 今後の統計関連学会連合大会への参加頻度	毎年	54%	52%	68%	72%
	1年おき	12%	6%	21%	20%
	2年おき	4%	10%	0%	0%
	その他	(別紙)			
Q7. 今後の計量生物学会の年次大会	行わない	19%	10%	33%	32%
	単独で行う	32%	53%	22%	28%
	その他	(別紙)			
Q8. 計量生物学会シンポジウムと年次大会との違い		(別紙)			
Q9. その他のご意見		(別紙)			
S1. 所属の他学会	応用統計学会	46%			
	日本計算機統計学会	25%			
	日本行動計量学会	18%			
	日本統計学会	40%			
	日本分類学会	9%			
S2. 性別	男性	90%			
	女性	7%			
	(欠損)	3%			
S3. 年齢	29歳以下	6%			
	30歳代	24%			
	40歳代	34%			
	50歳代	19%			
	60歳以	14%			
	(欠損)	3%			
S4. 職業	大学・大学院等の教職	30%			
	研究機関の研究者	16%			
	民間企業	40%			
	学生	3%			
	その他	6%			
	(欠損)	6%			